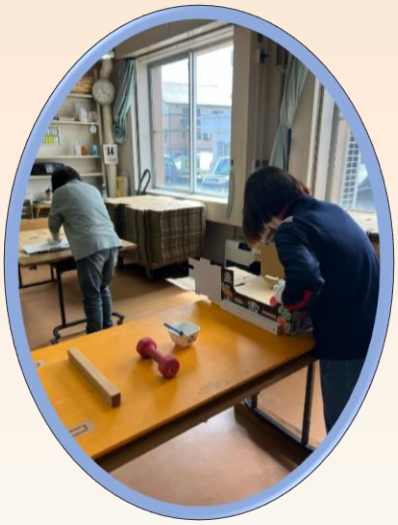
みんなで耕そう！
ノウフク
NOUFUKU PROJECT

令和７年度版

新潟県における「農福連携」の取組事例集



令和８年３月

新潟県農福連携推進連絡会議

目　次

＜令和７年度取材事例＞

1　農事組合法人　アグリ竹俣　・・・　Ｐ１
～農福連携で地域を担う～

2　社会福祉法人　青空会　すずかけ　・・・　Ｐ２
（就労継続支援Ｂ型事業所）
～農業と福祉が連携して生まれる地域づくり～

3　農事組合法人　中山物産　・・・　Ｐ３
～施設利用者の協力により、しめ縄製造・伝統文化の伝承へ～

4　株式会社　なごみ　なごみの水耕　・・・　Ｐ４
（就労継続支援Ｂ型事業所）
～水耕栽培で施設利用者の育てる喜びでお客様へ笑顔を届ける～

5　社会福祉法人　栃尾福祉会　みつけワークス　・・・　Ｐ５
（就労継続支援Ｂ型事業所）
～耕作放棄地を活用した地域交流により農福連携の拡大へ～

6　株式会社　麓　・・・　Ｐ６
～農福連携で従業員の作業の幅が拡大、労働力不足の解消へ～

（敬称略）

みんなで耕そう！

ノウフク

NOUFUKU PROJECT

目 次

＜令和６年度取材事例＞

7　社会福祉法人　中越福祉会
　　みのわの里ジョブプレイスもみじ　・・・　Ｐ７
　　（就労継続支援Ｂ型事業所）
　～新潟県の養鯉業と障害者福祉～

8　三膳　正蔵　・・・　Ｐ８
　～球根栽培の継続、農福連携で未来と心に花を咲かせる～

9　早津　知祥　・・・　Ｐ９
　～積極的な障がい者雇用で規模拡大、地域の農地維持にも貢献～

10　社会福祉法人　のぞみの家福祉会
　　ジョブプレイスのぞみふぁーむ　・・・　Ｐ10
　　（就労継続支援Ｂ型事業所）
　～農福連携を地域とともに取組む「結米(ゆめ)物語」～

11　特定非営利活動法人　立野福祉会
　　障がい者就労トレーニングファームチャレンジド立野　・・・　Ｐ11
　　（就労継続支援Ｂ型事業所）
　～地域の労働力不足解消に向け農福連携～

（敬称略）

みんなで耕そう！

ノウフク

NOUFUKU PROJECT

目　次

＜令和５年度取材事例＞

12　特定非営利活動法人　支援センターあんしん
　ワークセンターあんしん、きぼうワークス　・・・　Ｐ12
　（就労継続支援Ｂ型事業所）
～農福連携の相談窓口として「農」と「福」をつなぐ～

13　有限会社　角田山農園（カーブドッチワイナリー）　・・・　Ｐ13
～多数の福祉施設と連携して、ワイン用ぶどうの栽培に取り組む～

14　柄山そば生産組合（えちご上越農業協同組合）　・・・　Ｐ14
～要介護認定高齢者の経験を生かしてヨモギを製造～

15　株式会社　グリーンズプラント中越　・・・　Ｐ15
～廃棄していた食材を農福連携で有効活用～

16　医療法人　崇徳会　ワークセンターのっぺ　・・・　Ｐ16
　（就労継続支援Ｂ型事業所）
～ベビーリーフ収穫後に残った茎や葉を学食で提供～

17　社会福祉法人とよさか福祉会
　豊栄福祉交流センター　クローバー　・・・　Ｐ17
～食品加工で広がる農福連携の輪～

（敬称略）

みんなで耕そう！

ノウフク

NOUFUKU PROJECT

目　次

＜令和４年度取材事例＞

18　株式会社　サンクスファーム黒鳥　・・・　P 18
～障がい者の雇用で経営改善～

19　社会福祉法人　上越つくしの里医療福祉協会　つくし工房　・・・　P 19
（就労継続支援Ｂ型事業所）
～農福連携で地域に広がる笑顔の種～

20　新潟県中東福祉事務組合　ふなおか更生園　・・・　P 20
～栗拾い作業を通して社会参加を～

21　株式会社　ベジ・アビオ　・・・　P 21
～フルーツトマトの新商品開発を農福連携で実現～

22　株式会社　Moimoi ファーム　・・・　P 22
～牛舎内での作業連携でおいしい牛乳を食卓へ～

（敬称略）

注：各事例の表題の色は、**緑色が農業者の取組み**、**橙色が福祉事業者の取組み**になります。

障害者に対する就労支援

障がい者総合支援法における就労系障害福祉サービスには、就労移行支援、就労継続支援A型、就労継続支援B型、就労定着支援の4種類のサービスがあります。

●就労移行支援

就労を希望する障がい者であって、一般企業に雇用されることが可能と見込まれる者に対して、一定期間就労に必要な知識及び能力の向上のために必要な訓練を行います。

●就労継続支援A型

一般企業に雇用されることが困難であって、雇用契約に基づく就労が可能である者に対して、雇用契約の締結等による就労の機会の提供及び生産活動の機会の提供を行います。

●就労継続支援B型

一般企業に雇用されることが困難であって、雇用契約に基づく就労が困難である者に対して、就労の機会の提供及び生産活動の機会の提供を行います。

●就労定着支援

就労移行支援等を利用して、一般企業に新たに雇用された障害者に対し、雇用に伴う生じる日常生活又は社会生活を営む上での各般の問題に関する相談、指導及び助言等の必要な支援を行います。

新潟県農福連携推進連絡会議の情報はこちらから　➤

農事組合法人　アグリ竹俣
（新潟県新発田市下楠川）

～農福連携で地域を担う～

ブロッコリー苗
定植作業

野沢菜の
収穫作業

はざかけ米
「結米物語」

地元高校生と開発した
大豆加工品「はこ炒りむすめ」

農福連携に取り組んだ経緯

【経営概要】
・水稲　36ha　　・露地野菜　２ha

【取り組んだきっかけ】
法人設立と同時に、繁忙期の労働力不足解消のため農福連携の取組を開始しました。
その後、福祉事業所と一体となった取組の継続により、栽培管理や出荷・調整だけでなく、農作物の流通・販売分野でも連携するなど、取組を維持・拡大しています。

【農福連携に活用した支援策（相談窓口・事業等）】
（相談先）新発田市農林水産課など

障がい者の就労状況

【雇用者数】
・施設外就労受け入れ延べ人数　1,709人/年

【主な作業の内容】
・水稲、露地野菜管理作業、出荷調整、販売活動等

農福連携に取り組んでみて

【良かったこと・大変だったこと】
・農福連携をベースとした経営により、園芸部門の人手不足が解消し、主力の水稲部門に注力できることで収量品質の安定に繋がりました。
・地域住民と連携して作った「はざかけ米」や、地元の高校等と協力して開発した商品がふるさと納税の返礼品としても扱われ、農福連携の理解促進や地域の認知度向上に繋がりました。

【継続するための工夫】
・当法人の構成員の１名が福祉事業所の職業指導員的な立場で勤務しており、農福連携をスムーズに取り組めました。さらに、年間を通じた障がい者の受け入れが可能となり、受入れ人数の増加や、多種多様な活躍機会を創出しています。

これから農福連携に取り組もうと考えている農業者へ一言

・農福連携は地域における労働力不足や、地区内における遊休農地の発生防止に繋がります。
・地域の児童や住民と共に積極的に活動やイベントを行い、交流機会を創出することで地域の理解が進み、取組拡大が加速します。

（令和８年３月）

社会福祉法人　青空会
すずかけ（就労継続支援B型事業所）
（新潟県村上市川部）

～農業と福祉が連携して生まれる地域づくり～

ミニトマト収穫

選別・袋詰め作業

ドライトマト商品

米の計量作業

農福連携に取り組んだ経緯

【取り組んだきっかけ】
- 当事業所では地域の方との協働を通して、障がいのある方と地域の方が共に前に進むことを目指しています。以前より農家さんから苗箱洗いなどの作業を受託しており、令和５年度から県の農福連携コーディネーターとして活動しています。
- そのような中、以前から気になっていた事業所近隣の農業会社さんに思いきってお話したところ、ミニトマトの収穫や販売の作業のご依頼がありました。今ではお米の作業や食堂イベントとして「ミライすずかけ食堂」も一緒に開催させていただいています。
- また、収穫したトマト（規格外）を買い取り、事業所内でドライトマトに加工して販売しています。

【農福連携に活用した支援策（相談窓口・事業等）】
- 直接交渉

障がい者の就労状況

【作業利用者数】
- １日平均：収穫２～３名、選別６～７名、計量・袋詰め１～２名

【主な作業の内容】
- ハウス整備、収穫、袋詰め、選別、シール貼り、計量、箱詰め、草取り、苗箱並べ、苗箱洗いなどを行っています。

農福連携に取り組んでみて

【良かったこと】
- 地域の方との繋がりや作業の幅を広げることができました。地域の一員として自信とやりがいをもって日々の作業に取り組んでいます。

【大変だったこと】
- 夏場のハウス内作業は、とても高温のため、熱中症対策を徹底する必要があります。
- 最近は熊の出没が多くなっていることから、熊よけ対策も徹底する必要があります。

【継続するための工夫】
- 農福連携から生まれた自主製品製作、共同で行うイベント行事（ミライすずかけ食堂）などの創出を一緒に考えながら展開することが継続に繋がっています。

これから農福連携に取り組もうと考えている福祉関係者へ一言

- 福祉事業所を知っていただく機会になったとともに、障がいのある方もない方も共に地域で生きる仲間として理解することができる絶好の機会です。
勇気をもって一歩前進しましょう！

（令和８年３月）

農事組合法人　中山物産
（新潟県新潟市江南区）

～施設利用者の協力により、しめ縄製造・伝統文化の伝承へ～

刈取り後の
稲わら回収作業

稲わら選別調整作業

細かいわらの
除去作業前のしめ縄

しめ縄に
装着する飾り花

バラしめ縄
完成品の包装

農福連携に取り組んだ経緯

【経営概要】
・水稲（主食用）16ha、しめ縄用の稲わら（伊勢錦）1.9haの生産及びしめ縄製造
【取り組んだきっかけ】
・しめ縄製造のため、地域の方々をパートやアルバイト雇用していましたが、高齢化で人手が集まらず困り、平成30年に農福連携の研修会に参加したところ、主催者から農福連携を勧められたことから、取り組みをはじめました。

障がい者の就労状況

【提携施設】
・当初は新潟市内の１つの福祉事業所と取り組み、現在は新潟市内外の９つの福祉事業所に作業を依頼しています。
【主な作業内容】
・施設外作業で、しめ縄の原料となる稲わらの刈取り後における回収及び乾燥した稲わらの調整作業を依頼しています。（期間：７月下旬～８月上旬）
・年間（稲わらの刈取り時期を除く）を通してしめ縄製造を行っています。
・各福祉事業所の施設内労働として、「当法人の社員が作成したしめ縄から飛び出ているわらの除去」、「しめ縄に装飾する飾り花の製造」、「バラしめ縄の装飾や包装・梱包」の作業を依頼し、各作業の完了後、納品してもらいます。
・各作業には、１日当たり２～３福祉事業所からそれぞれ４名程度参加し、ほ場及び作業所で作業を行っています。

農福連携に取り組んでみて

【良かったこと、大変だったこと】
・地域の方々が高齢となり人手が集まらず困っていましたが、農福連携により労働力の確保ができました。
・農福連携に取り組んだ当初は、施設利用者への作業内容の説明に苦労しましたが、福祉事業所の作業指導員に、作業内容を丁寧に伝えることで施設利用者の作業がスムーズに行われ、しめ縄商品の品質が向上しました。
・夏場の稲わら刈取り後の回収作業においては、マンパワーが必要で施設利用者からの協力は非常に助かっています。
【継続するための工夫】
・それぞれの福祉事業所に材料を運搬していましたが、当法人敷地内に新しく作業施設を建設したことで運搬や納品工程が無くなったため作業効率が上がり、スムーズに作業を行えるようになりました。

これから農福連携に取り組もうと考えている農業者へ一言

・農家と施設利用者のお互いがメリットを感じるコミュニケーションが大切と感じています。
・施設利用者に気持ちよく作業してもらうために、常に言葉を掛けるよう心掛けています。

（令和８年３月）

株式会社　なごみ

なごみの水耕（就労継続支援B型事業所）
（新潟県燕市）

～水耕栽培で施設利用者の育てる喜びでお客様へ笑顔を届ける～

水耕施設内部での作業

出荷調整作業（梱包）

直売所等での販売

施設外就労（除草作業）

農福連携に取り組んだ経緯

【取り組んだきっかけ】
農業を通じて「育てる喜び、収穫する喜び、お客様から美味しいと言ってもらった時の喜びを施設利用者にも伝えたい 」という想いから、完全室内型の水耕栽培設備を導入し、令和３年５月に就労継続支援Ｂ型事業所「なごみの水耕」として農福連携の取組を開始しました。

【農福連携に活用した支援策（相談窓口・事業等）】
厚生労働省の社会福祉施設等施設整備費補助金を活用

障がい者の就労状況

【年間作業利用者数】
・年間延べ　約7,000名

【主な作業の内容】
・水耕施設内でのスプラウトやレタス、バジルなどの管理、収穫、調整、出荷の各作業、大豆管理作業等の施設外就労作業。
・直売所等での販売活動、その他軽作業

農福連携に取り組んでみて

【良かったこと】
・水耕栽培により無農薬で農産物を栽培することで、付加価値のある商品を多様な販路で販売でき、施設利用者の工賃向上に繋がりました。
・水耕施設を活用することにより、多様な人々が働くことができる職場環境を創出できました。
・農産物の対面販売や施設外就労の経験が、施設利用者の一般就労への意欲向上に結び付きました。

【継続するための工夫】
・地域内外の関係者や企業と連携して販路や働く場を確保すること、作業環境の安全性強化、作業の標準化など。

これから農福連携に取り組もうと考えている福祉関係者へ一言

・農業は体力向上、認知能力の維持、ストレス軽減など、心と体を健康にしてくれる優れた効果が期待できます。
・施設利用者の得意を伸ばせる作業環境を作ることができれば、農業に従事するみんなが元気に、やりがいをもって仕事に励める体制を構築でき、売上ＵＰにも繋がると考えています。

（令和８年３月）

社会福祉法人　栃尾福祉会
みつけワークス（就労継続支援B型事業所）
（新潟県見附市）

～耕作放棄地を活用した地域交流により農福連携の拡大へ～

ニラ茶「にらめっこ」

ニラのトウ、茎の調製作業

利用者と園児で
サツマイモ掘りの共同作業

耕作放棄地で生産したサツマイモ

農福連携に取り組んだ経緯

【取り組んだきっかけ】
- 令和元年から見附市特産品のニラを生産する農家から外葉の選別作業を受託し、農福連携を本格的に開始しました。
- 令和２年、ニラの選別作業で分別したトウや茎の廃棄部分を活用し、ニラ茶（商品名：にらめっこ）を商品化しました。にらめっこは、見附市の物産館やＪＡ直売所での販売のほか、見附市ふるさと納税返礼品として好評を得ています。
- 令和５年、施設利用者の工賃アップや自立を目指し市内の耕作放棄地を借り受け、じゃがいも、サツマイモ、枝豆、アスター（盆花の切り花）を生産しています。

障がい者の就労状況

【主な作業の内容】
- ニラの選別、袋詰めを行っています。（期間：６月～10月、５～８人／日）
- ニラ茶の製造、パック詰め、包装作業を行っています。（期間７月～８月、５～６人／日）
- サツマイモ、じゃがいも、枝豆、盆花の栽培管理を行っています。
  （期間：５月～10月：５～６人／日）
- サツマイモの収穫作業を通じて、健常者との交流、コミュニケーション能力の拡大や自立を目的に地域の園児との共同作業を実施しています。（期間：10月、７名程度／日）

農福連携に取り組んでみて

【良かったこと】
- 耕作放棄地で生産した農産物等を販売し、施設利用者の工賃アップを図ることができました。
- サツマイモは焼き芋にして、地域の催しで対面販売することで、施設利用者に社会参加への自覚が芽生えてきました。

【継続するための工夫】
- 令和７年から施設利用者と地域の園児との共同作業を行うことで、コミュニケーション能力の覚醒効果や自立への意識が高まり、継続に繋がっています。
- 施設利用者が地域と繋がることで、農福連携の理解や認知度が向上してきました。

これから農福連携に取り組もうと考えている福祉関係者へ一言

- 地域の繋がりを広げるため、農福連携に根気強くチャレンジしてもらいたいと思います。

（令和８年３月）

株式会社　麓
（新潟県中魚沼郡津南町）

～農福連携で従業員の作業の幅が拡大、労働力不足の解消へ～

雪下にんじんの包装シール

バターピーナッツかぼちゃ
（右側：磨いた商品）

出荷用の段ボール箱の組立

農福連携に取り組んだ経緯

【経営概要】
- 全耕作面積28haのうち、水稲は棚田状のほ場15haで栽培、津南町の地域特産品の雪下にんじん2.5ha、とうもろこし15haなどの生産を行っています。
- 近隣の農家さんの生産物の仕入・販売を行い、地域の生産流通の一端を担っています。
- 雪下にんじん等を原料とした６次化商品の開発、製造・販売にも取り組んでいます。

【取り組んだきっかけ】
- 新潟県主催の農福連携研修会で勧められ、令和７年春から町内の就労継続支援Ａ型事業所及びＢ型事業所の２事業所と農福連携を開始しました。

障がい者の就労状況

【作業内容・作業者数等】
- 就労継続支援Ａ型事業所には、施設内で雪下にんじんの包装にシール貼りを委託しています。
（期間：４月～７月、１日当り３名程度）
- 就労継続支援Ｂ型事業所には、出荷専用段ボールの組立及びバターピーナッツかぼちゃの表面磨きを委託しています。
（期間：８月～９月、１日当り３名程度、段ボールは１日当たり約250箱組立）

農福連携に取り組んでみて

【良かったこと、大変だったこと】
- 農福連携に取り組んだことで従業員がほかの作業を行うことができ、作業効率が上がるなどメリットがありました。
- 施設利用者は、想像以上に作業が丁寧でスピード感もあり一生懸命でとても助かります。
- 今後、雪下にんじんの皮むきなど高収益作物の一次加工処理の委託を検討したいと思います。
- 高齢化による労働力不足が課題の中で、地域農業の一翼を担うことができると感じています。

【継続するための工夫】
- 福祉事業所の作業指導員と相談しながら、得意・不得意を見極め、気持ちよく作業ができるように作業内容、環境整備に努めました。

これから農福連携に取り組もうと考えている農業者へ一言

- 生産者が考えている以上に、施設利用者は作業能力があり助かっています。福祉事業所と相談しながら、地域で農福連携を進めていきましょう！

（令和８年３月）

社会福祉法人　中越福祉会

みのわの里ジョブプレイスもみじ（就労継続支援B型事業所）
（新潟県長岡市来迎寺4150番地）

～新潟県の養鯉業と障害者福祉～

錦鯉　成魚

稚魚選別作業

消毒剤散布

養鯉池除草作業

農福連携に取り組んだ経緯

【取り組んだきっかけ】
- 養鯉業者より市へ、障害者との協業ができないか相談があり、新潟が誇る文化の一つである養鯉業との連携に取組ませていただきました。
- 養鯉業も人手不足で毎年作業に苦慮していたということで、両者にとって利益のある相互効果の高い関係を築くことができました。

【農福連携に活用した支援策（相談窓口・事業等）】
（県）新潟県農福連携コーディネーター（工房こしじ）
長岡市障害福祉課活動係

障がい者の就労状況

【年間作業利用者数】
- 年間延べ（58名）

【主な作業の内容】
- 稚魚選別、餌の調合、養鯉池周りの除草

農福連携に取り組んでみて

【良かったこと】
- 新潟県を代表する産業、文化に携わる事で、利用者自身が地場産業に貢献する喜びを感じる事ができました。

【大変だったこと】
- 稚魚が小さい為に、選別時には泳ぎ回る稚魚を的確に選別する事は難しく、その判断も絶対的なものがない為に作業の標準化が難しかったです。
- 長時間の屋外作業となるため、利用者の体調管理に気を遣いました。

【継続するための工夫】
- 受託した作業を利用者に携わっていただく為に、工程を細分化し適性等を見極めながら作業提供する事で、企業の求める水準をクリアし再現性の高いプロセスを構築しました。

これから農福連携に取り組もうと考えている福祉関係者へ一言

- 農福連携は多くの価値提供に繋がると思います。他業種連携は無限の可能性。

（平成７年３月）

三膳　正蔵
（新潟県新潟市東区）

～球根栽培の継続、農福連携で未来と心に花を咲かせる～

球根の掘り取り

球根収穫作業

調整後の球根

選別見本

調整作業風景

農福連携に取り組んだ経緯

【経営概要】
・水稲　3.6ha、　・園芸（球根以外）35ａ　　・球根　100ａ

【取り組んだきっかけ】
球根栽培では人手が多く必要な作業があり、以前は10名以上の季節パート従業員を雇用して行っていたが、近年、人手の確保が難しくなりJA職員に相談したところ、福祉との連携について提案を頂きました。新潟市あぐりサポートセンターより連携の説明を受け２カ所の施設に作業依頼したところ、戦力になると確認できましたので継続しています。

【農福連携に活用した支援策（相談窓口・事業等）】
（相談先）新潟市あぐりサポートセンター

障がい者の就労状況

【雇用者数】
作業時期は６月後半～８月中旬。２カ所の施設から各（１回）３～５名
調整作業は月～金、事業所が交代で連日作業実施。作業時間は１回２～３時間

【主な作業の内容】
球根の掘り取り・掘り取り後の選別調整

農福連携に取り組んでみて

・福祉と連携してからは人手が多く必要な時期に毎年、複数名で来てもらえるため、人手を探すことがなく安心しています。初年度はハウス内での選別作業を主にお願いしましたが、２年目からは畑での掘り取り作業も依頼しています。季節的な作業を毎年行ってもらいますが、皆さん、作業を覚えていて、スムーズに始めてもらえて助かっています。
・選別作業は判断が曖昧なところもあるため、覚えて頂くまでには時間が必要でした。また、写真を用いて、○・×表示での【選別基準】も作成しました。
・２か所の施設からきてもらっていますが、比べることなく各施設の得意・不得意を理解し職員（支援者）とのコミュニケーションを大切にしています。助かっている事を伝えたり、直してもらいたい事は直ぐに伝える様にしています。

これから農福連携に取り組もうと考えている農業者へ一言

福祉との連携では、今まで行ってきた作業時間や作業のやり方に拘らず、可能な範囲で柔軟に考えてみる事も必要だと感じています。最初は不安もあると思いますが、双方が相手を思う気持ちで接する事で、今では強力な戦力（良きパートナー）です。

（令和７年３月）

早津　知祥
（新潟県上越市）

～積極的な障がい者雇用で規模拡大、地域の農地維持にも貢献～

えだまめ畑

枝豆のもぎ取り選別

さつまいもの収穫

畑の整備

農福連携に取り組んだ経緯

【経営概要】
・野菜（露地：えだまめ９ha、キャベツ3.3haなど、ハウス0.25ha：オクラ、ほうれんそうなど）７品目を栽培。就農して６年目になります。

【取り組んだきっかけ】
・建設関係で数年間働いた後、上越市の就労継続支援事業所「土の香工房」に就職。現在も職業指導員として従事しています。土の香工房で農福連携に取組んでいたことから、自身も農業に関心を持ち、上越市内の農業法人で１年半研修した後、職業指導の経験を活かし就農と同時に農福連携にも取組み始めました。

障がい者の就労状況

【雇用者数】
・就農当初：就労継続支援Ａ型３名。⇒Ｒ６年：13名（就労継続支援Ａ型９名、就労継続支Ｂ型４名）
・１日２～３名、繁忙期は５～６名、年間約200日程度の農作業を行っています。
・一人当たりの作業時間は、就労継続支援Ａ型：４～5.5ｈ、就労継続支援Ｂ型：１～３ｈ。

【主な作業の内容】
・野菜の収穫・選別・袋詰め・シール貼り。

農福連携に取り組んでみて

【良かったこと、大変だったこと】
・就農当時50ａだった経営面積が、現在では20倍以上にまで拡大することが出来ました。
・特に令和６年に高齢化で作れなくなった８haの畑を引き受け、えだまめを増産しました。農福連携で労働力を確保できたことで規模拡大が可能となり、地域の農地維持にも繋がりました。
・利用者の働く場の確保、賃金・工賃を向上することが出来ました。
・個々の利用者の障がいの程度を理解することや得意・不得意を見極め、気持ちよく作業を行ってもらうように気をつけています。

【継続するためのポイント】
・作業を行う場合は、休憩を細目に取ることや作業を急がせないこと、また、コミュニケーションの時間をつくることが大事です。
・障がい者の目線で作業を効率的に行う観点から、野菜の収穫サイズが判断できるように、尺棒（スケール）を作りました。

これから農福連携に取り組もうと考えている農業者へ一言

・農家と障がい者のお互いがメリットを感じる関係性が大切と感じています。
・障がい者に気持ちよく作業してもらうために、肯定的な言葉を掛けるよう心がけています。

（令和７年３月）

社会福祉法人　のぞみの家福祉会
ジュブプレイスのぞみふぁーむ（就労継続支援B型事業所）
（新潟県新発田市）

～農福連携を地域とともに取組む「結米（ゆめ）物語」～

しいたけの選別・パック作業

パックしたなすとアスパラガス

刈った稲をハサ掛け

コメ「結米物語」

農福連携に取り組んだ経緯

【取り組んだきっかけ】
- 施設利用者が生きがいを感じ取り組める仕事として、地域の基幹産業である農業を選択しました。地域では高齢化・担い手不足で耕作放棄地が増えつつあるという課題があり、その解消の一環として農家が管理できなくなった土地を借りてアスパラガスや大豆の「一人娘」等の栽培に取り組みました。
- また、地域の農事組合法人、保育園、特別支援学校と連携し、田植や稲刈りのイベントも開催し収穫米の一部を**「結米（ゆめ）物語」**（天日干しコシヒカリ）として販売しています。そのほかにしいたけやキクラゲを栽培・販売しており、大変好評です。

【農福連携に活用した支援策（相談窓口・事業等】
- （県）新事業チャレンジ支援事業を活用（デザイン・パッケージ）

障がい者の就労状況

【主な作業内容など】
- 米の販売、しいたけ、キクラゲ、アスパラガス等野菜の収穫・パック詰め、直売所等への納品。地域農家より委託された農産物の収穫やハウスの片付け作業等
- 障がい者作業人数：約20人／日（通年）

農福連携に取り組んでみて

【良かったこと、大変だったこと】
- イベント等で商品を買っていただいた人から「おいしい」と言ってもらえ、施設利用者の励みや喜びになっています。また、農作業に出た日は、良い睡眠がとれていると聞いています。
- 作業委託農家からは、「作業労力が軽減され、経営改善に繋がった」と大変感謝されています。

【継続するためのポイント】
- 施設利用者の特性に合わせて作業工程を細分化したり、農家との信頼関係の構築に努めました。

これから農福連携に取り組もうと考えている福祉関係者へ一言

- 農家となんでも相談できるような信頼関係づくりが大事だと思います。
- 地域の農家が減少してきているので、農業の継続や地域の活性化のため、農福連携への期待が大きいと感じており、農福連携は障がい者の働く場の確保、工賃アップに繋がります。
- 施設利用者の年齢が年々上がってきています。若い障がい者の方に農福連携の魅力や効果をもっと知ってもらい、農福連携を通して社会参画のきっかけにしてほしいです。

（令和7年３月）

特定非営利活動法人　立野福祉会

障がい者就労トレーニングファームチャレンジド立野（就労継続支援B型事業所）
（新潟県佐渡市）

～地域の労働力不足解消に向け農福連携～

採種キャベツの移植

堆肥処理

大豆の乾燥

アートサロン和

農福連携に取り組んだ経緯

【取り組んだきっかけ】
- 働きたくても働く場所がない障がい者と地域の担い手不足両方の課題を解決するため、2013年４月に小規模作業所を開設しました。
- また、地域内において耕作できない農地が増えてきたことから、農福連携により、農地の借り受けや農作業受託などを行うことで地域農業の活性化と農地の維持・管理にも努めてきました。

障がい者の就労状況

【年間作業利用者数】
- 年間作業利用者　40名

【主な作業の内容】
- 田植、稲刈り、堆肥処理、稲わら収集・乾燥、採種キャベツ、柿収穫の他、雨天時には、大豆、ゴマの乾燥、選別、球根の出荷作業、冬期間はボランティアで除雪作業を行っています。

農福連携に取り組んでみて

【良かったこと、大変だったこと】
- 障がいの程度により、作業を切り出し、各人の適正に応じた作業を任せることで、障がい者のやりがいにも繋がっています。
- 耕作放棄地の解消と地域農業の維持が図られ、地域から感謝される存在になっています。
- 古民家を改修したカフェ「アートサロン和（やわらぎ）」の開設により、地域との交流、さらに地域外からの来訪者も増加し、地域活性化に繋がっています。
- 米粉菓子、佐渡番茶、あんぽ柿などを製造しており、現在は、JA直売所等に販売していますが、当初は販路を探すことに苦労しました。

【継続するためのポイント】
- 地域行事などに参加し交流を深め信頼を得ることが必要だと思います。

これから農福連携に取り組もうと考えている福祉関係者へ一言

- 障がい者が働きやすい環境づくりや個々の得意な所を見つけてあげることが大事だと思います。

（令和７年３月）

特定非営利活動法人　支援センターあんしん
ワークセンターあんしん、きぼうワークス（就労継続支援B型事業所）
（新潟県十日町市高田町）

～農福連携の相談窓口として「農」と「福」をつなぐ～

田の草取り

乾燥野菜加工

事業所内で枝豆の選別

ノウフクマルシェでの販売

農福連携に取り組んだ経緯

【取り組んだきっかけ】
・自然と文化に恵まれた妻有地域において、地域貢献として、地域の産業の一つである農業に携わりたいとの思いから、令和元年に県十日町農業普及指導センター主催の「十日町地域農福連携セミナー」に参加し、農業・福祉相互の理解促進を目的とした施設外就労等の実践研修「おためしノウフク」を実施しました。
・利用者の仕事の幅を広げ、豊かな日常を送ることと工賃の向上を目的とし、令和2年から本格的に「農福連携」の取組を開始しました。
【農福連携に活用した支援策（相談窓口・事業等）】
・（相談先）十日町農業普及指導センター
・（県）令和3年度多様な人材が活躍できる農業推進（農福連携支援）
　活用内容：施設外作業環境の改善（水田用草刈機、除草機等）

障がい者の就労状況

【年間作業利用者数】
・年間延べ24名
【主な作業の内容】
・農作物生産（自社）：水稲（コシヒカリ）、野菜（大根、サツマイモ、大豆、パクチーなど）
・作業受託：かぼちゃの定植、トマトの摘果・摘葉、ねぎ収穫、大根洗浄、畑のマルチ除去、田植・除草・稲刈、出荷パッケージのシール貼り、育苗箱洗など

農福連携に取り組んでみて

【良かったこと、大変だったこと】
・利用者にとっては、施設外就労することで、工賃アップや依頼元の農業者からの感謝やねぎらいの声を聞くことで作業意欲の向上や喜び、やりがいを実感できました。
・作業の対価として金銭ではなく、こちらの希望した規格外の野菜をいただき、それを給食センターから買ってもらうことで、地域内循環の仕組みが構築できました。
・暑い中、利用者さんから安全に作業してもらうための体調管理が大変でした。
【継続するための工夫】
・「ワークセンターあんしん」が窓口となり、十日町市内外の福祉事業所、行政、農業関係団体が連携した農業連携の受入体制が構築され、持続的な取組に繋がりました。

これから農福連携に取り組もうと考えている福祉関係者へ一言

・まずは、チャレンジしてみて、そこから自分たちができること、得意なことを探り、その結果として地域から求められる存在になれると思います。

（令和６年３月）

有限会社　角田山農園（カーブドッチワイナリー）
（新潟県新潟市西蒲区）

～多数の福祉施設と連携して、ワイン用ぶどうの栽培に取り組む～

除葉作業の様子

収穫前のぶどう畑

収穫作業の様子

ワインショップ（外観）

農福連携に取り組んだ経緯

【経営概要】
・ワイン用ぶどうを栽培し、自家醸造ワインを製造、販売しています。
・平成4年に角田浜で栽培を始め、砂地の畑を土壌改良し面積を広げています。
・現在の栽培面積は8.5ha。他に契約栽培を県内外に依頼しています。
【取り組んだきっかけ】
・新潟市あぐりサポートセンターの説明を受け、平成27年度に新潟市の『施設外就農促進事業』の謝礼金を活用し作業を依頼したところ、丁寧な作業で助かると感じ連携開始。その後に依頼作業を増やし、複数の施設との連携を行っています。

障がい者の就労状況

【雇用者数】
・福祉施設の施設外作業として、1回2時間程度の作業を複数の施設に依頼しています。
・収穫期（8/下～10/中）は14施設、それ以外は6施設が交代で作業実施しています。
・作業参加の人数は、1施設3名～7名程で支援員が同行しています。
【主な作業の内容】
・ワイン用ぶどうの除葉・収穫・剪定後の枝集め。畑の除草。

農福連携に取り組んでみて

【良かったこと、大変だったこと】
・ワイン用ぶどう栽培は、手作業が多いため、一部の作業を農福連携で行うことで、社員は専門的な作業に専念することでができ、ワインの品質にも良い影響が出ています。
・支援員が同行しているので、個々への指示や作業確認も任せられるので安心しています。
・複数の施設と連携しているので、施設ごとに担当者と連絡を取る必要があります。また、作業指示等が、各施設に同じ内容で伝わるように気をつけています。
【継続するためのポイント】
・年間の作業スケジュールを見直し、時期ごとの作業を計画的に施設へ依頼するようにしています。
・施設利用者へ作業の必要性や感謝の言葉を伝えたり、年数を重ねている施設とは報酬アップの相談をする等、一緒に働く者同士、施設利用者が『やりがい』を感じて頂けるように心掛けています。

これから農福連携に取り組もうと考えている農業者へ一言

・作業全体の中で工程や判断が少ない作業を任せ、最初は効率を求めずに見守る気持ちを持つことが大切と感じています。

（令和６年３月）

柄山そば生産組合（えちご上越農業協同組合）
（新潟県上越市板倉区）

～要介護認定高齢者の経験を生かしてヨモギを製造～

ヨモギの収穫作業

葉こき作業

乾燥後のヨモギ

農福連携に取り組んだ経緯

【経営概要】
・そば10.5ha、ヨモギ２ａ

【取り組んだきっかけ】
・中山間地域の活性化と農家所得の向上を目指し、令和３年から耕作放棄地を活用したヨモギ栽培を開始しましたが、収穫後に茎から葉を外す「葉こき作業」が手作業で手間がかかることが栽培拡大のネックになっていました。このため、地域活動で交流があった福祉施設に令和５年から葉こき作業を委託しました。

障がい者の就労状況

【作業内容・作業者数】
・１日４時間程度の葉こき作業（約20kgのヨモギの葉が取れます）を年間約20日。
・福祉施設（みやじまの里 清心荘）のデイサービスを利用する要介護認定高齢者と、隣接する就労継続支援Ｂ型事業所（板倉ふれあい工房）の障がい者の方とを合わせて、平均10名程度で作業をしています。

農福連携に取り組んでみて

【良かったこと・大変だったこと】
・手間がかかる葉こき作業を委託したことで、より多くのヨモギを収穫できるようになりました。
・この地域では、かつて、子供がヨモギを集めて学校に持ち寄り、教育資金に充てる習慣があったことから、高齢者は自分の子供時代を思い起こしながら、生き生きと作業に取り組んでくれました。また、障がい者にコツを教えながら一緒に作業を行うことで、これまで見られなかった高齢者と障がい者の交流も生まれました。
・ヨモギを収穫する人数が少なかったこともあり、福祉施設に持ち込むヨモギの量が安定せず、作業量の平準化には苦労しました。

【継続するためのポイント】
・高齢者の方に、若い頃にやり慣れた作業をお願いしたことが良かったと思います。

これから農福連携に取り組もうと考えている農業者へ一言

・地域活動を通じて、日ごろから福祉施設と交流することで、お互いの課題を共有することができ、農福連携の可能性が広がると思います。
・新潟では他の地域でもヨモギを集める習慣がかつてはあり、また、食品企業等からの需要もあるので、同様の取組を他地域でもできるのではないでしょうか。

（令和６年３月）

株式会社　グリーンズプラント中越
（新潟県長岡市）

～廃棄していた食材を農福連携で有効活用～

播種作業

ハウス内で青々と育った
ベビーリーフ

収穫後に残った茎・葉
の摘み取り作業

学食のサラダは大好評

農福連携に取り組んだ経緯

【経営概要】
・天候の影響を抑え、安定的に栽培できる太陽光・人工光併用型植物栽培施設（温室ハウス２棟）を活用し、サニーレタスやルッコラ、みずな、こまつななどのベビーリーフをホテル、レストランや市場に出荷しています。

【取り組んだきっかけ】
・平成27年から、社会貢献の一環として、福祉施設に紹介してもらい障がい者の雇用を始めました。
・ベビーリーフを収穫した後に残る茎や葉を、根と一緒に産業廃棄物として焼却していましたが、「まだ食べられるのに」との思いから、食材として活用できないかと考え、長岡市及び「みのわの里　工房こしじ」の農福連携コーディネーターに相談したところ、就労継続支援Ｂ型事業所「ワークセンターのっぺ」を紹介され、令和４年から「のっぺ」が運営する喫茶店や大学の学食でサラダ等に利用されるようになりました。（「のっぺ」の取組みは事例集16ページ参照）

【農福連携に活用した支援策（相談窓口）】
・長岡市産業イノベーション課、みのわの里　工房こしじ（新潟県農福連携コーディネーター）

障がい者の就労状況

【主な作業の内容と雇用者数等】
・平成27年から、１～２名を通年雇用し、栽培資材の片付けや清掃、播種作業を担当。
・また、週２回、「のっぺ」利用者１～２名が来園し、ベビーリーフの収穫後に残った茎・葉の摘み取り作業を行います（30分～１時間程度）。

農福連携に取り組んでみて

【良かったこと・大変だったこと】
・社員が障がい者と一緒に作業することで、自然と障がい者への思いやりや理解が深まりました。
・収穫後に残る茎や葉を摘み取って活用してもらうことで、産業廃棄物の削減につながりました。
・障がい者が従事する作業の切り出しや、作業に使う道具の工夫（は種量を正確に量れるようにしました）には苦労しました。

【継続するためのポイント】
・随時コミュニケーションを取りながら、作業してもらいたい内容を的確に伝えることが重要だと思います。

これから農福連携に取り組もうと考えている農業者へ一言

・働く環境の整備や作業の内容は、障がい者の方の身になって考えることが大事だと思います。
・作業のやり方を説明する時は、あせらず丁寧に教えることで信頼関係が深まると思います。

（令和６年３月）

医療法人　崇徳会
ワークセンターのっぺ（就労継続支援B型事業所）
（新潟県長岡市）

～ベビーリーフ収穫後に残った茎や葉を学食で提供～

収穫後に残った茎・葉の摘み取り作業

作業を標準化してハサミで収穫

学食のランチに添えた茎・葉

選別作業

農福連携に取り組んだ経緯

【取り組んだきっかけ】
- 長岡市産業イノベーション課、新潟県農福連携コーディネーターから「産業廃棄物として処分している、ベビーリーフ収穫後に残った茎や葉を活用できないか。」と声を掛けていただいたのがきっかけです。もったいない気持ちから何とかしたいと思いました。
- 茎・葉の摘み取り作業と選別作業は、福祉事業所の作業種目が増えるため、利用者の新たな仕事として位置付けました。
- 収穫した茎・葉は、福祉事業所で運営している喫茶店や大学の学食で選別作業を行い、サラダ等に活用しています。

【農福連携に活用した支援策（相談窓口・事業等）】
- （県）新潟県農福連携コーディネーター（みのわの里　工房こしじ）

障がい者の就労状況

【主な作業内容など】
- 茎・葉の収穫、選別　週２日　２人／日（通年）

農福連携に取り組んでみて

【良かったこと、大変だったこと】
- 作業種目が増えたことで、利用者の適性に合わせた作業を提供できました。
- 茎・葉を無償で提供いただいたことで、喫茶店や学食の食材費を減らすことができました。
- 利用者の得手不得手を確認する機会として活用できました。
- 残った茎や葉の有効利用により、産業廃棄物の処分量の減少に微力ながら貢献できました。
- 誰が作業を行っても同じ品質になるような作業方法の工夫（標準化）に苦労しました。
- 施設外での作業のため、同行するスタッフの確保に苦労しました。

【継続するためのポイント】
- 作業日（曜日）を固定することで、同行スタッフの業務の工面ができました。

これから農福連携に取り組もうと考えている福祉関係者へ一言

- 「もったいない」から始まった取組でした。お互いに「良かった」と思えることが農福連携には、まだたくさんあると思います。

（令和６年３月）

社会福祉法人とよさか福祉会
豊栄福祉交流センター　クローバー
（新潟県新潟市北区）

～食品加工で広がる農福連携の輪～

納豆製造作業

玉ねぎの収穫作業

蜂蜜瓶詰作業

クローバー納豆
カメヨコなっとう

農福連携に取り組んだ経緯

【取り組んだきっかけ】
・15年以上前から地域農家からの依頼で除草作業等を行っていました。また、センター内の食品加工施設を活用し、国産大豆を使用した納豆（クローバー納豆）の製造・販売を行っていました。
・平成27年には、新潟市あぐりサポートセンターの農福連携の研修会で大豆を生産する農業法人や養蜂農家と知り合い、農業法人から納豆製造（カメヨコなっとう）を、養蜂農家からは蜂蜜瓶詰作業・ラベル貼等の作業を頼まれました。従来のクローバー納豆の原料もこの農業法人の大豆に切り替えました。さらに、養蜂農家、※1フードコーディネーターと一緒に※2ビスコッティなどの商品開発にも取組む等、徐々に農福連携の幅が広がっていきました。
※1 中小企業庁の「よろず支援拠点事業」を活用。※2 イタリアの伝統菓子で硬い焼き菓子のこと。

【農福連携に活用した支援策（相談窓口）】
・新潟県障害福祉課、新潟市あぐりサポートセンター

障がい者の就労状況

【主な作業内容と作業利用者数】
・施設外作業　枝豆の除草・マルチ除去、養蜂箱の防腐剤塗布、苗箱洗いなど。６～７人／日
・施設内作業　納豆製造　１０人／日（通年）、蜂蜜の瓶詰　４人／日（通年）

農福連携に取り組んでみて

【良かったこと・大変だったこと】
・農作業を通じて障がい者が社会貢献できることを色々な方に伝えられることが嬉しい。また、施設外の人から評価されることで障がい者も自信がつきます。
・令和２年からは、新潟県障害福祉課から農福連携コーディネーターの委託を受け、農業者と福祉事業所のマッチングにも取組んでいます。コーディネーター業務は、農業と福祉の双方の理解が必要であり、色々な人と出会えることから、職員の人材育成に繋がりました。
・一方で、障がい者ができる作業を見極めて、作業工程を分けるなど細かい工夫が大変でした。また、暑い時期の作業では、施設利用者の体調管理に気を遣いました。

【継続するためのポイント】
・農業者が求めることを常に考えながら、信頼を獲得することが大事です。また、失敗しても農業者と一緒に腹を割って話し合えるような関係性を築くことが必要だと思います。

これから農福連携に取り組もうと考えている福祉関係者へ一言

・ただ単に農作業を受託するのではなく、福祉側が農業者の立場に立ったうえで、お付き合いすることが大事です。そうすることでお互いにWin-Winの関係性が築けます。

（令和６年３月）

株式会社サンクスファーム黒鳥
（新潟県新潟市西区）

～障がい者の雇用で経営改善～

玉ねぎ調整作業

栽培体験：ブロッコリー定植

苗箱洗い

農福連携に取り組んだ経緯

【経営概要】
・水稲40ha（受託面積含む）、枝豆９ha、たまねぎ0.5ha、ブロッコリー１ha、かぶ0.1ha、農産加工品販売（きな粉、餅、冷凍枝豆、納豆）

【取り組んだきっかけ】
・平成28年に社員を募集していた中、新潟市あぐりサポートセンターに相談したところ、障がい者福祉事業所との連携のアドバイスを受けました。

【農福連携に活用した支援策】
・新潟市　農業を活用した障がい者雇用促進事業（平成28年度）

障がい者の就労状況

【雇用者数】
・新潟市西区内の３つの福祉事業所と連携する中で、平成29年から１名を通年雇用しています。
・そのほか、各事業所ごとに週一日、曜日を固定し３名程度受入、作業時間は２時間です。

【主な作業の内容】
・育苗箱洗浄、たまねぎ収穫・調整、枝豆莢むき、種子用大豆の調整作業

農福連携に取り組んでみて

【良かったこと】
・後回しにしていた軽作業を任せることで社員が機械作業、営業、販売に専念でき、作業効率がアップしました。
・労働力不足の心配がなくなりました。
・障がい者との接し方を話し合うことで、社員間の意思疎通が円滑になりました。

【大変だったこと】
・事業所支援員との細部にわたる打合せに時間を要したことです。

これから農福連携に取り組もうと考えている農業者へ一言

・天候に左右されない作業の切り出しが重要です。

（令和５年３月）

社会福祉法人　上越つくしの里医療福祉協会
つくし工房　（就労継続支援B型事業所）
（ 新潟県上越市 ）

～農福連携で地域に広がる笑顔の種～

ひまわり畑

ひまわり種採取

つくしひまわりステーション

ひまわりオイル

農福連携に取り組んだ経緯

【取り組んだきっかけ】
- 平成22年に地域の活性化を目的に、川室記念病院がリハビリで使用していた畑を再利用してひまわり栽培を始め、地域住民の憩いの場として提供しました。
- 平成26年には、ひまわりの種から搾油に取り組みはじめ、地域住民等との交流拡大を目的とした「つくしひまわりにっこりプロジェクト」を令和２年度からスタートさせました。
- プロジェクトは、畑作りから収穫、搾油まで工房利用者と地域住民等が協力して取り組んでおり、現在は2.2haの畑に約20万本のひまわりを栽培しています。

【農福連携に活用した支援策（事業等）】
- 搾油等作業所整備のため、農水省の農山漁村振興交付金を活用（令和元年度）

障がい者の就労状況

【年間作業利用者数】
- 年間延べ35名（４月～翌年３月まで）

【主な作業の内容】
- ひまわり：草刈り、種まき、刈り取り、ひまわりオイルの搾油
- その他：らっきょうの葉切り、オイルを活用した菓子製造販売

農福連携に取り組んでみて

- ひまわりオイルや加工品の製造・販売により、工房利用者の工賃アップにつながりました。
- プロジェクトに取り組んだことで、工房利用者と地域住民との交流が始まったことや耕作放棄地の利用が地域貢献に繋がっていること、自分たちが絞ったひまわりオイルの販売などが利用者の励みとなり、心や体の健康に好影響をもたらしています。
- 夏場の暑さ対策、栽培面積増加による人手不足や鳥害対策に苦心しています。

これから農福連携に取り組もうと考えている福祉関係者へ一言

- 農福連携は、工房利用者の心と体の健康に好影響をもたらし、また、農福連携に取り組むことで地域の耕作放棄地の解消など地域貢献にも繋がると実感しています。

（令和５年３月）

新潟県中東福祉事務組合　ふなおか更生園

生活介護
（新潟県五泉市 ）

～栗拾い作業を通して社会参加を～

農福連携に取り組んだ経緯

【取り組んだきっかけ】
・作業収益の向上を目指し新たな受注作業を探していたところ、新潟県農福連携コーディネーターを通して栗農家を紹介していただきました。もともと作業の一環として自家農園で野菜の栽培を行っており、その強みも活かせる作業内容でした。
・農家も人手不足で毎年収穫作業に苦慮していたということで、両者にとって利益のあるウィンウィンの関係を築くことができました。

【農福連携に活用した支援策（相談窓口）】
（県）新潟県農福連携コーディネーター

障がい者の就労状況

【年間作業利用者数】
・栗の収穫作業　４名×10日程度
【主な作業の内容】
・栗の収穫作業

農福連携に取り組んでみて

・野外での作業ということで、時に雨の中で虫に刺されながら作業を行うこともありますが、作業終了後に籠いっぱいになっている栗を見ると充実感を得られるようで「早く栗拾い作業をしたい。」という言葉も聞かれます。また、利用者が農家から感謝され、それが「自分たちにもできる！」という自信にもつながっているようです。
・地域の特産品である栗の作業を請け負うことで、利用者が地域貢献に直接携われることがすごく良かったと感じています。

これから農福連携に取り組もうと考えている福祉関係者へ一言

・最初は不安な事もたくさんあると思いますが、農家と密に連絡し合う事で不安は払拭されます。まずは一歩を踏み出すこと、これに限ると思います。

（令和５年３月）

株式会社　ベジ・アビオ
（新潟県新潟市北区 ）

～フルーツトマトの新商品開発を農福連携で実現～

ハウスのトマト

生食用トマト

ドライトマト

トマトジュース

農福連携に取り組んだ経緯

【経営概要】
・温度や照度、養液をＩＣＴ技術でしっかり管理したハウス（34ａ）で高糖度・中玉トマト品種のフルティカを栽培しています。

【取り組んだきっかけ】
・会社の設立当初は従業員が少なく、労働力確保のため、農福連携で芽かき作業（トマト苗が生長する過程で生じる不要な脇芽を摘み取る作業）や生食用トマトのパッケージラベル貼付作業の一部を委託していましたが、今は生食用トマトのパッケージラベル貼付作業や新商品のドライトマトとトマトジュースの製造を福祉事業所（３ヵ所）に委託しています。

【農福連携に活用した支援策（相談窓口・事業等）】
・新潟市あぐりサポートセンターに相談し、新潟市の『施設外就農促進事業』の謝礼金を活用（平成29年度）

障がい者の就労状況

【主な作業内容・雇用者数】
・生食用トマトのパッケージラベルの貼付。トマトの収穫状況に応じて、１回の作業は約10名（９月～翌年６月まで）。作業は福祉事業所で行っています。
・ドライトマト、トマトジュースの製造は、ラベル貼付とは別の２つの福祉事業所に委託しています。

農福連携に取り組んでみて

・福祉事業所利用者が一生懸命作業する姿をみて、農福連携でもっと社会に貢献したいと感じています。
・ラベル貼付作業を委託したことで、従業員がトマト栽培に従事する時間が増え、トマトの生産性や品質が向上し甘くておいしいトマトができました。
・トマトはどうしても規格外品が発生しますが、ドライトマトやジュース製造のノウハウのある福祉事業所に製造を委託したことで、食品ロスの大幅削減が実現し、新商品の販売で売上が増加しました。

これから農福連携に取り組もうと考えている農業者へ一言

・農福連携は、作業の見直しで生産性の向上が期待できます。一方で福祉事業所利用者に気持ちよく作業してもらうためには、心と時間に余裕をもって接することが大事だと思います。

（令和５年３月）

株式会社　Moimoi ファーム
（新潟県新潟市南区 ）

～牛舎内での作業連携でおいしい牛乳を食卓へ～

牛舎遠景

牧草の給餌

給餌後の清掃

水飲み場の掃除

農福連携に取り組んだ経緯

【経営概要】
・成牛（経産牛）約80頭と育成牛を飼育しています。

【取り組んだきっかけ】
・酪農は、乳牛の世話や牛舎の清掃など多くの人手を必要としています。そこで、新潟地域振興局へ相談したところ農福連携を勧められ、新潟市あぐりサポートセンターを紹介されました。
・依頼可能な作業を検討して新潟市内の就労事業施設向けに「作業見学会」を行い、２ヶ所の福祉施設と請負作業を契約しました。

【農福に活用した支援策（相談窓口）】
・新潟県新潟地域振興局、新潟市あぐりサポートセンター

障がい者の就労状況

【雇用者数】
・令和３年10月以降、２ヶ所の就労事業施設が毎週交代で作業（週３回、各施設毎に毎回２～３名）

【主な作業内容】
・３種類の作業≪水飲み場の掃除≫≪牧草の給餌≫≪もみ殻の袋詰め≫
・施設作業者が変わっても同一の作業ができるように、清掃方法・給餌の量・もみ殻の消毒等についてマニュアルを作成しています。また、給餌の際に量目が確認しやすいように、秤に色付けの工夫をしています。

農福連携に取り組んでみて

・作業がスムーズに出来るか心配でしたが、就労事業施設職員が同行している事もあり直ぐに安心して任せる事ができました。時間の決まった作業があるため、以前は慌ただしく動くことがありましたが、最近は余裕をもって作業を任せられます。
・施設利用者が作業をしながら牛に声をかけている姿を見ると、微笑ましいです。
・今後も農福連携を継続していきたいと思っています。

これから農福連携に取り組もうと考えている農業者へ一言

・当初、頼みたいと考えた作業の中には、無理な作業もありましたが、作業の一部を頼むことで想像以上に時間の余裕ができたと実感しています。
・まずは、悩むより困っている事を相談することから始めてほしいと思います。

（令和５年３月）

ノウフク

はじめませんか！農福連携の第一歩を！

【お問い合わせ先】
新潟県農福連携推進連絡会議　事務局
北陸農政局新潟県拠点　地方参事官室
ＴＥＬ　０２５－２２８－５２１６
〒　951-8035　新潟市中央区船場町2-3435-1